

# 簡易版GHG算定ツール操作マニュアルの目次は以下の通り

## 簡易版GHG算定ツール操作マニュアル

### 目次

#### 1 [利用目的](#)

簡易版GHG算定ツール作成の経緯・目的および位置づけ

#### 2 [利用方法](#)

簡易版GHG算定ツールの外観

簡易版GHG算定ツールへの入力方法

分析可能なサプライチェーン

アウトプットのバウンダリ

#### 3 [参考資料](#)

各用語の解説

インプットデータの主な出所

算定ロジックや排出原単位の想定

ベースライン機器やサービス需要の想定

稼働率の想定

# 1 利用目的

## 【1簡易版GHG算定ツール作成の経緯・目的および位置づけ】

簡易版GHG算定ツールは、水素SC導入の検討段階にある自治体や事業者を対象とし、GHG削減量の規模感の把握や事業者への参画を促す検討材料として活用する

### 本ツール 作成の 経緯・目的

- エネルギーとしての水素利用が、有力な地球温暖化対策の一つの手段として注目されており、主要諸国を中心に水素を利用したエネルギーサプライチェーンの導入が進められつつある
- 一方で、水素は製造から輸送利用に至るまで様々な水素SCの方式が検討されており、採用する方式毎にGHGの排出量が異なるため、水素SC導入によるGHG削減量の把握が難しく、当該特性は導入の検討段階にある自治体や事業者にとって導入の妨げの一つとなっていた
- 水素SC導入の検討段階にある自治体や事業者といった水素事業に精通しないユーザーが、簡易的にGHG削減量の規模感を把握することを目的とした

### 簡易版GHG算定ツール（※本ツール）

### 水素サプライチェーンにおける 温室効果ガス削減効果計算ツール

### 主なユーザーと 活用シーン

水素SC導入検討段階の自治体や事業者が  
GHG削減量の規模感を把握する

水素SC実装段階の自治体や事業者が  
精緻なGHG削減量を算定する

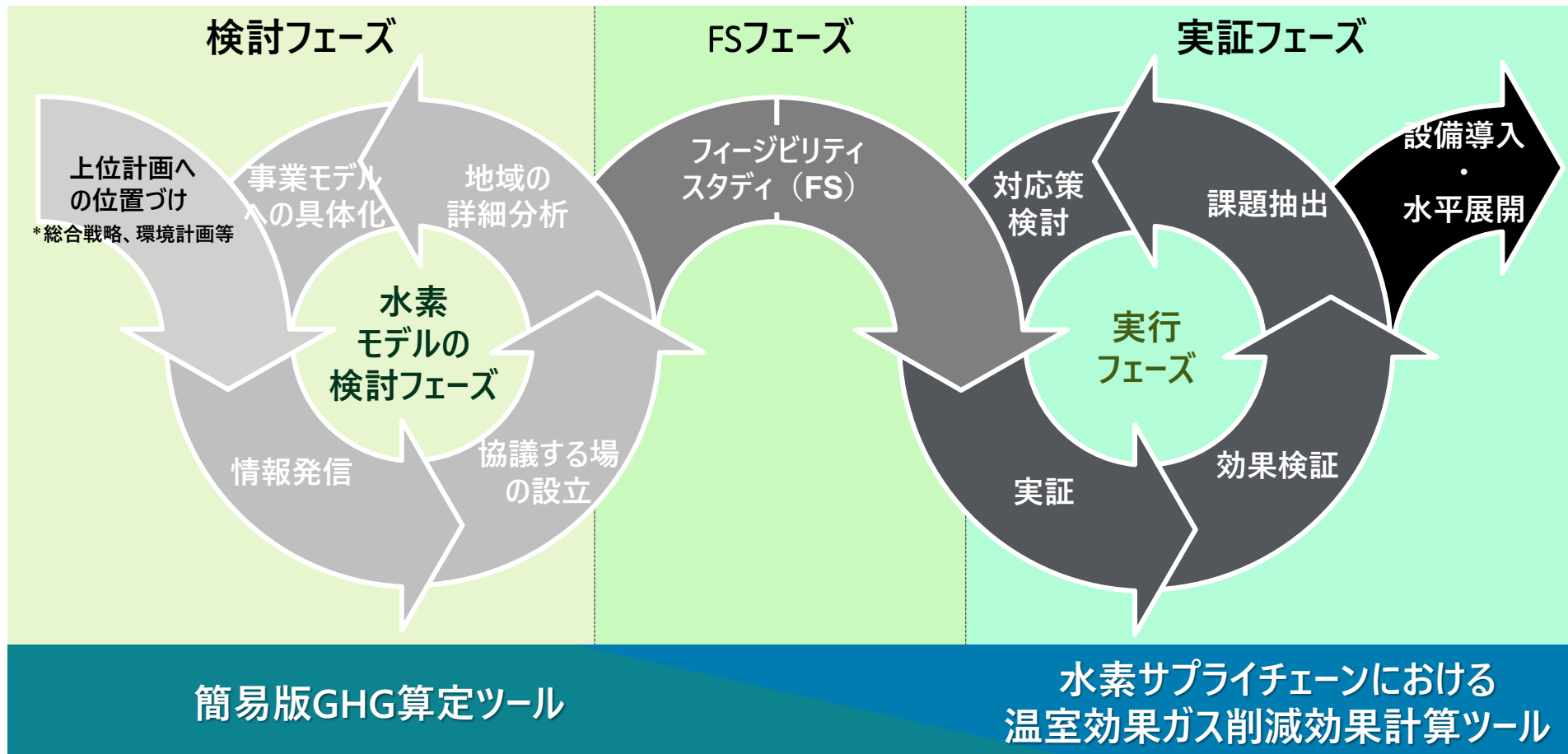
### ツール の位置づけ

- 分析可能なサプライチェーンは過去の実証事業等をもとに典型的な水素SCのパターンで類型化
- アウトプットはISOやLCAガイドライン等を参照し、複数の典型的なバウンダリで算定

- サプライチェーンは詳細な算定条件（輸送距離やベースラインの燃料等）が設定可能
- アウトプットはLCAベースのGHG排出量を算定

< 1 参考：各フェーズに対応する2つのGHGツール >

簡易版GHG算定ツールは水素SCの導入検討フェーズ／FSフェーズの自治体向けに利用いただくことを想定している



- 簡易版GHG算定ツールを通じて、水素SCを構築するとどの程度GHG削減が見込めるか規模感を把握
- 温室効果ガス削減効果計算ツールを通じて、地域に特化したサプライチェーン情報を入力し、より詳細なGHG排出量・削減量を算定

## 2 利用方法

## 【2簡易版GHG算定ツールの外観（1/2）】

簡易版GHG算定ツールは、ツール上部で水素SC、年間水素製造量、年間稼働率を入力することで、ツール下部でGHG排出量、GHG削減量、GHG排出係数が自動出力される

凡例 # 入力項目 # 出力項目

入力画面

算定条件の入力 以下のStep1～3に沿って、評価する水素サプライチェーンの情報を設定してください（赤点線枠内）

**1 Step1 サプライチェーンの設定**

想定する水素サプライチェーンに係る以下3つの情報をプルダウンにて選択してください

- 水素利用機器（家庭用燃料電池、燃料電池自動車等）
- 貯蔵・輸送・供給方法  
⇒利用機器と対応していない方法を選択した場合、グレーアウトされます
- 水素の製造方法  
⇒「水電解・再エネ」を選択した場合、再エネを水素製造に利用する割合（1%～100%）を入力することで、下図に必要な再エネ設備容量を表示します

水素利用機器	業務用純水素燃料電池
貯蔵・輸送・供給方法	水素吸蔵合金
製造方法	水電解・メガソーラー
水素製造への再エネ利用割合	メガソーラー・水素製造 50%

**2 Step2 年間水素製造量の設定**

想定する水素サプライチェーンの規模を設定するため、以下の①・②いずれかを入力することで、年間水素製造量を設定してください

① Step1で設定した水素利用機器の想定利用台数  
② 年間水素製造量をNm3単位で直接入力  
⇒②に直接入力する場合は、①を空欄にしてください

①業務用純水素燃料電池の導入台数	1,000	台
1台数による取扱水素量	9,290,909	Nm3/年
②直接入力の場合の水素製造量		Nm3/年

**3 Step3 年間稼働率の設定**

水素製造機器の稼働頻度を低位、中位、高位から選択してください  
※各稼働率の想定イメージ

低位・実証フェーズ 改質+精製: 10% 水電解: 14~25% <small>原料調達が断続的で稼働率が低い想定</small>	中位・事業化フェーズ 改質+精製: 45% 水電解: 47~52% <small>低位と高位の中間フェーズを想定</small>	高位・商用フェーズ 80% <small>一般的なプラントのメンテナンスと稼働状況を想定</small>
--	---	--

年間稼働率 低位

**4 [参考] 構築する水素サプライチェーンのイメージ図**

製造

メガソーラー	60863 kW
水電解装置 (300Nm3/h規模)	21 台

貯蔵・輸送・供給

2tトラック	4 台
水素吸蔵合金カセット (20kg/カセット)	2349 カセット

利用

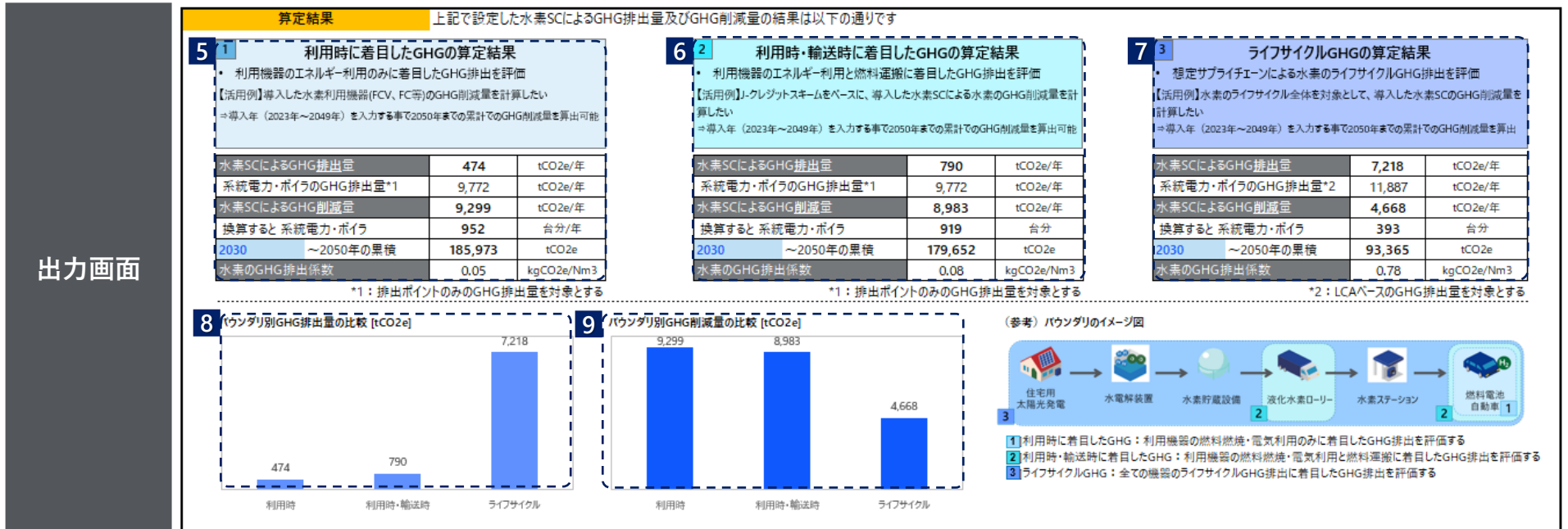
業務用純水素燃料電池	1000 台
出力	3.5 kW

- 1
  - 導入したい水素サプライチェーンについて、水素利用機器／貯蔵・輸送・供給方法／製造方法の3つの区分でプルダウン形式で入力してください
  - 太陽光発電・風力発電と水電解装置で水素を製造する場合、水素製造以外に電力を直接利用する割合を入力することで、[4]で算出される必要な設備規模が算出されます（但し、水素のGHG排出量には直接関係ないため、アウトプットには影響ありません）
- 2
  - サプライチェーンの規模を設定するため、年間水素製造量を設定します
  - 水素利用機器の導入台数を入力いただくか、水素製造量（Nm3ベース）を直接入力してください
- 3
  - 製造時におけるの機器の稼働率について、低位・中位・高位をプルダウン形式で選択してください
- 4
  - [1]～[3]で選択した水素サプライチェーンのイメージ図とともに、必要な設備規模が自動出力されます

## 【2簡易版GHG算定ツールの外観（2/2）】

簡易版GHG算定ツールは、ツール上部で水素SC、年間水素製造量、年間稼働率を入力することで、ツール下部でGHG排出量、GHG削減量、GHG排出係数が自動出力される

凡例 # 入力項目 # 出力項目



- 5**
  - 利用機器のエネルギー消費を対象としたGHG排出量、GHG削減量およびGHG排出係数の結果が自動出力されます
  - ✓ GHG削減量については、従来システムの排出量で換算した削減量が算出されます
  - 従来システム（ベースライン）のGHG排出量は、温対法の排出係数を用いて算定されます
- 6**
  - 利用機器のエネルギー消費及び水素輸送に伴うエネルギー消費を対象としたGHG排出量、GHG削減量およびGHG排出係数の結果が自動出力されます
  - ✓ GHG削減量については、従来システムの排出量で換算した削減量が算出されます
  - 従来システム（ベースライン）のGHG排出量は、温対法の排出係数を用いて算定されます
- 7**
  - 水素製造から利用までのライフサイクルを対象としたGHG排出量、GHG削減量およびGHG排出係数の結果が自動出力されます
  - ✓ GHG削減量については、従来システムの排出量で換算した削減量が算出されます
  - 従来システム（ベースライン）のGHG排出量は、IDEAの排出係数を用いてライフサイクルベースで算定されます
- 8**
  - バウンダリ別のGHG排出量の比較結果がグラフベースで自動出力されます
- 9**
  - バウンダリ別のGHG削減量の比較結果がグラフベースで自動出力されます



## 【2】簡易版GHG算定ツールの入力方法

簡易版GHG算定ツールでは、水素SC、水素製造量、稼働率をインプットとすることで、バウンダリ別のGHG排出量・削減量がアウトプットとして算出される

凡例	水色	直接入力	緑色	数式（入力不可）
	青色	プルダウンから選択	紫色	任意入力

	水素サプライチェーン	年間水素製造量	年間稼働率
インプット	<p>■ 導入する水素サプライチェーンをプルダウン形式で選択</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>➢ ①水素利用機器②貯蔵・輸送・供給方法③製造方法をプルダウン形式で選択</li> <li>➢ ①・②は親和性が高いアプリケーション・パターンで類型化し、入力を簡素化</li> <li>➢ 再エネ発電は水素製造に直接利用する割合を数値で入力</li> </ul>	<p>■ 想定する年間水素製造量を方式a, bのいずれかで入力</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>➢ 水素アプリケーションの導入規模から簡易に取扱水素量を設定*する場合、方式aにて導入規模を入力</li> <li>➢ Nm3ベースの年間取扱水素量が分かる場合、方式bにて入力</li> </ul>	<p>■ 水素製造機器の年間稼働状況をプルダウン形式で選択</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>➢ 水素製造の機器の稼働頻度を低位・中位・高位から選択</li> <li>➢ 実証フェーズを低位、商用フェーズを高位、その中央値を中位として、プルダウン形式で選択</li> </ul>
操作イメージ	<p>①水素利用機器の選択 <span style="float:right">プルダウン</span></p> <p>燃料電池自動車 ▼</p> <p>②貯蔵・輸送・供給方法の選択</p> <p>ローリー+液体水素ST ▼</p> <p>③製造方法の選択</p> <p>住宅用太陽光+水電解装置 ▼</p> <p>(水素製造の再エネ利用割合)</p> <p>住宅用太陽光・水素製造 XX%</p>	<p>方式a：利用機器の導入規模による入力</p> <p>XXX 台</p> <p style="text-align:center">or</p> <p>方式b：取扱水素量による入力</p> <p>XXX Nm3/年</p>	<p>年間稼働率 <span style="float:right">プルダウン</span></p> <p>高位 ▼</p>

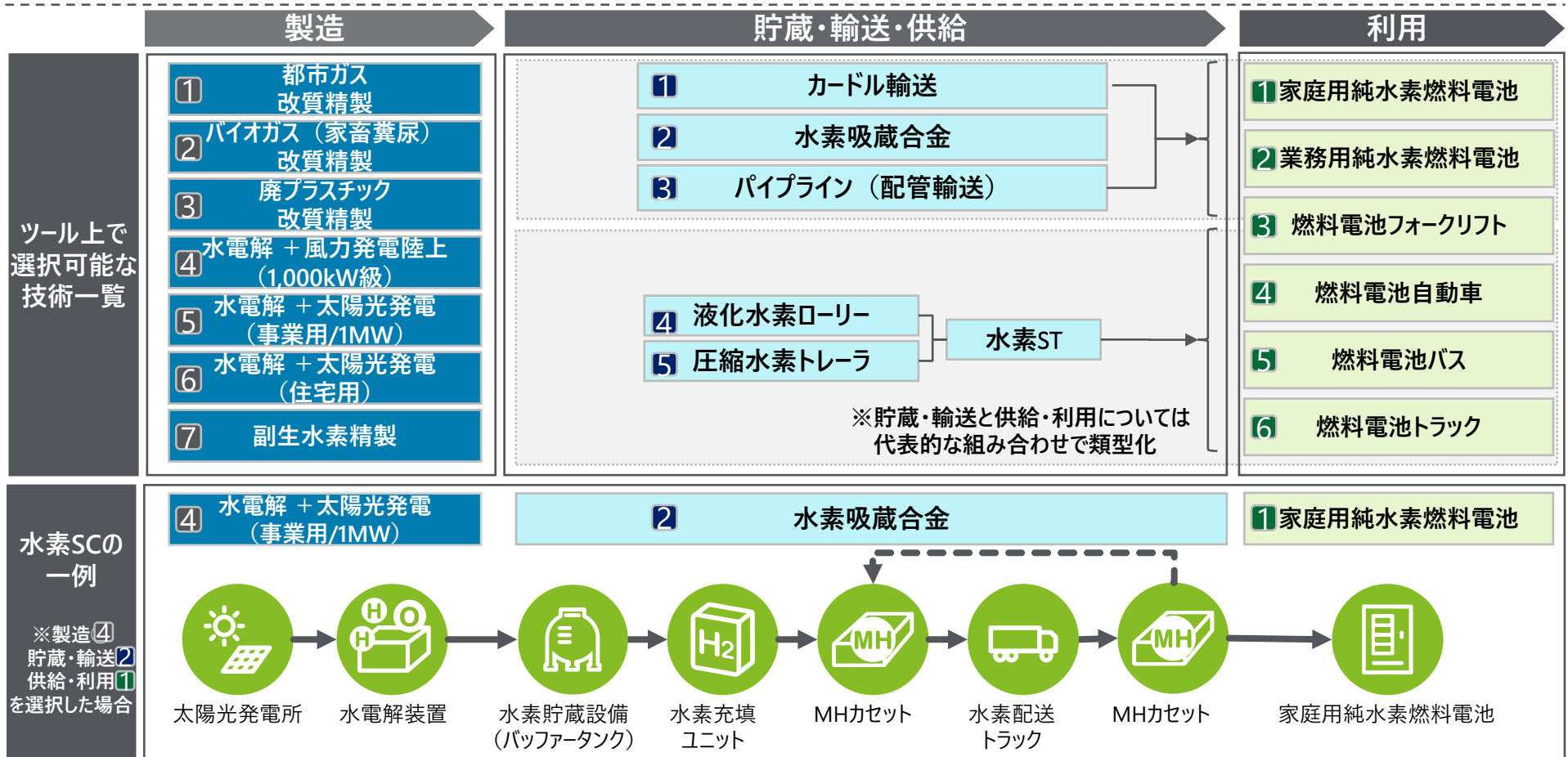
水素サプライチェーン導入によるGHG排出量・削減量					
アウトプット	<p>■ 3つのバウンダリ毎に、GHG排出量・削減量及び排出係数を算出</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>➢ [1]利用時に着目したGHG[2]利用時・輸送時に着目したGHG [3]ライフサイクルGHG それぞれのバウンダリで算出</li> <li>➢ GHG削減量については、従来システムの排出量から換算した削減量や導入年(2023~2049)を入力する事で2050年までの累積削減量が算出</li> </ul>	水素SCによるGHG排出量	XXX	tCO2e/年	
		従来システムGHG排出量	xxx	tCO2e/年	
		水素SCによるGHG削減量	YYY	tCO2e/年	
		換算すると従来システム	yyy	台分/年	
		20XX	~2050年の累積	y y y	tCO2e
		水素のGHG排出係数	ZZZ	kgCO2e/Nm3	



## 【2】簡易版GHG算定ツールで分析可能なサプライチェーン

水素SCは、製造、貯蔵・輸送・供給、利用の3プロセスで構成されており  
 ツール上ではそれぞれ代表的な技術が選択可能

- 評価対象となる水素利用システムのSCを製造、貯蔵・輸送・供給、利用の3つのプロセスで区分した
- 各プロセスについて、ツール上では代表的な技術が選択可能（製造7種、貯蔵・輸送・供給5種、利用6種）



## < 2 参考：簡易版GHG算定ツールで分析可能なサプライチェーン >

# 本ツール上で扱う代表的な水素scのパターンは、過去の実証に基づき類型化した



### 各実証事業の詳細は以下HPを参照

#### ■ 「脱炭素化に向けた水素サプライチェーン・プラットフォーム」

“水素社会実現を目指す官公庁の取組-脱炭素化に向けた水素サプライチェーン構築の推進”を参照

#### 2 ミルクだけじゃない、家畜ふん尿からの水素製造

- 事業名/家畜ふん尿由来水素を活用した水素サプライチェーン実証事業 ■ 実証場所/北海道河東郡鹿追町および帯広市
- 実施代表者/エアウォーター(株) ■ 共同実施者/鹿島建設(株)、日鉄ハイライン&エンジニアリング(株)、日本エアプロダクツ(株)
- 協力自治体/北海道、鹿追町、帯広市

つくる	ためる・はこぶ	つかう
<p>家畜ふん尿由来のバイオガスより水素を製造</p>	<p>輸送用に圧縮 カード等で需要地へ輸送</p>	<p>数地内の水素ステーションからFCVやFCELに供給 テゾフザメ飼育施設やおびろ動物園に純水素燃料電池を設置し活用</p>

#### 1 フォークリフトへ再生水素をお届け、簡易型水素充填車

- 事業名/京浜臨海部での燃料電池フォークリフト導入とクリーン水素活用モデル構築実証 ■ 実証場所/京浜臨海部
- 実施代表者/トヨタ自動車(株) ■ 協力自治体/神奈川県、横浜市、川崎市

つくる	ためる・はこぶ	つかう
<p>風力発電所ハマウイングの電力を用いて水素を製造</p>	<p>水素は貯蔵タンクへ送られたのち圧縮され、簡易型水素充填車によって輸送</p>	<p>青葉市場や物流倉庫に導入したFCELへ、簡易型水素充填車から水素を供給</p>

#### 3 未利用の副生水素を有効活用、さまざまな輸送方法で県内へお届け

- 事業名/苛性ソーダ由来の未利用な高純度副生水素を活用した地産地消・地域間連携モデルの構築 ■ 実証場所/山口県周南市
- および下関市 ■ 実施代表者/(株)トクヤマ ■ 共同実施者/東ソー(株)、山口県、周南市、下関市

つくる	ためる・はこぶ	つかう
<p>パフアプラットフォームや、企業間水素融通配管で効率的に水素を回収後、輸送方法の異なる4種のサプライチェーンで利用</p>	<p>パイプラインで近隣のスイミングクラブに輸送 圧縮後、道の駅へカード輸送</p>	<p>スイミングクラブに設置された純水素燃料電池で活用 道の駅に設置された純水素燃料電池で活用 FCVやFCELへ供給、市場や漁港などに設置の純水素燃料電池や純水素ボイラーで活用</p>

## 【2簡易版GHG算定ツールにおけるアウトプットのバウンダリ】

簡易版GHG算定ツールでは、スコープで区分された3種類のアウトプットを基本とする

アウトプットの種類	1 利用時に着目したGHG排出量・削減量	2 利用時・輸送時に着目したGHG排出量・削減量	3 ライフサイクルのGHG排出量・削減量
算定対象のGHG排出	<ul style="list-style-type: none"> <li>域内の水素利用機器のエネルギー利用に伴うエネルギー起源CO<sub>2</sub></li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>域内の水素利用機器のエネルギー利用に伴うエネルギー起源CO<sub>2</sub></li> <li>水素の運搬に伴うエネルギー起源CO<sub>2</sub></li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>想定サプライチェーンにおける水素のライフサイクル全体のGHG排出*<sup>1</sup></li> </ul>
参考となる方法論	ISO 14064-1/ISO 14064-2		LCAガイドライン
想定される自治体ニーズの一例	域内に導入した水素利用機器(FCV・FC等)のGHG削減量を計算したい	導入する水素SCによる水素によるGHG削減をJ-クレジット化した場合を想定し、事業者に参画を促したい	導入する水素SCのGHG削減効果をLCA全体で計算したい
バウンダリのイメージ	<p>The diagram illustrates the hydrogen supply chain with three numbered sections:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><b>Section 1 (Residential Solar Power):</b> Includes '住宅用太陽光発電' (Residential solar power) and '水電解装置' (Water electrolysis device).</li> <li><b>Section 2 (Hydrogen Production, Storage, and Transport):</b> Includes '水素貯蔵設備' (Hydrogen storage equipment), '液化水素ローリー' (Liquefied hydrogen truck), and '水素ステーション' (Hydrogen station).</li> <li><b>Section 3 (Hydrogen Station and Vehicle):</b> Includes '燃料電池自動車' (Fuel cell vehicle).</li> </ul>		

\*1： 廃棄物由来のバイオガス改質のみ、糞尿等からのCH<sub>4</sub>及びN<sub>2</sub>Oの排出を計上。それ以外はエネルギー起源CO<sub>2</sub>のみを計上しており、非エネルギー起源CO<sub>2</sub>、CH<sub>4</sub>、N<sub>2</sub>O、HFCs、PFCs、SF<sub>6</sub>（通称5.5ガス）は現時点で算定対象外としている。

## 3 参考資料

### 【3用語の解説】

## 本ツールで使用する用語の解説を以下に示す

項目	内容
GHG（温室効果ガス）	■ 太陽によって温められた地表から放射される熱を吸収し、地表付近を温める働きがあるガス
GHG排出量	■ 温室効果ガスの排出量
排出係数	■ 単体量あたりの温室効果ガスの排出量
バウンダリ	■ 境界の意。本ツールでは特にGHG算定対象範囲の境界を指す
ISO	■ International Organization for Standardization（国際標準化機構）の略称
LCA （ライフサイクルアセスメント）	■ 対象システムのライフサイクル全体（使用段階だけでなく、製造段階や廃棄処理段階等を含めたバウンダリ）を通じた環境負荷を定量的に評価する手法
GHG削減量	■ 評価対象システム（水素利用システム）と比較対象システム（従来システム）とのGHG排出量の差分
水素利用システム	■ 水素をエネルギーとしたエネルギーサプライチェーンモデル
従来システム	■ 水素利用システムが存在しなかった際に、普及していると想定されるエネルギーサプライチェーンモデル
エネルギーサプライチェーン	■ エネルギーの製造から消費までの一連の工程

### 【3簡易版GHG算定ツールにおけるインプットデータの主な出所】

排出係数やエネルギー効率、輸送燃費を公的な統計や報告書、カタログ値等から収集

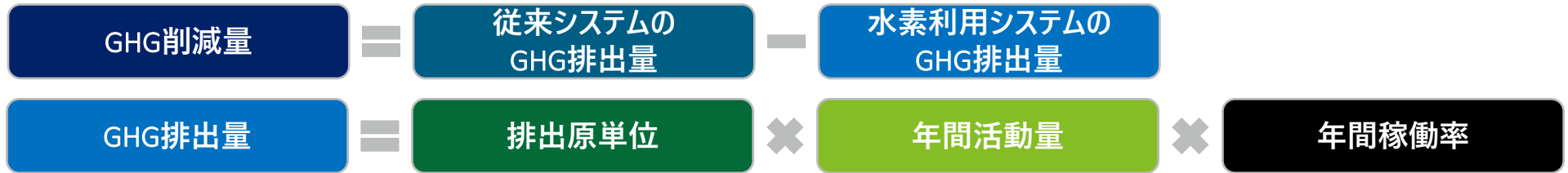
項目		主な出所
GHG 排出係数	原材料 資本財	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 産業技術総合研究所「LCIデータベース IDEA version 3.1」</li> <li>■ 国立環境研究所「産業連関表による環境負荷原単位データブック（3EID）」</li> </ul>
	燃料	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 総合エネルギー統計・エネルギー源別標準発熱量</li> </ul>
	再エネ	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 電力中央研究所（2010）「日本の電力発電技術のライフサイクル CO2 排出量評価」</li> </ul>
	廃棄物	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 産業技術総合研究所「LCIデータベース IDEA version 3.1」</li> </ul>
エネルギー効率・稼働率等		<ul style="list-style-type: none"> <li>■ NEDO「燃料電池・水素技術開発ロードマップ2010」</li> <li>■ 日本エネルギー経済研究所「水素エネルギー利活用のあり方に関する調査」</li> <li>■ NEDO「蓄電池戦略（2012/7）」</li> <li>■ 日本自動車研究所「燃料電池システム等実証研究（第2期 JHFC プロジェクト）報告書」</li> <li>■ 各メーカーカタログ値</li> <li>■ 事業者ヒアリング 等</li> </ul>
輸送車両燃費		<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 国土交通省「自動車燃費基準（ガソリン乗用車、路線バス）」</li> </ul>

出所：環境省「[水素サプライチェーンにおける温室効果ガス削減効果に関する LCA ガイドライン Ver.2.1](#)」、環境省「水素サプライチェーンにおける温室効果ガス削減効果計算ツール」



### 【3簡易版GHG算定ツールにおける算定ロジックや排出原単位の想定】

**GHG削減量は、「従来システムのGHG排出量－水素利用システムのGHG排出量」**  
**GHG排出量は、「排出原単位×年間活動量×年間稼働率」**によって算定される



■ 活動量あたりのGHG排出量

- <例>
- 電力1kWhあたりのGHG排出量
  - 燃料1LあたりのGHG排出量

■ 活動規模に関する量

- 水素システムの場合は、水素サプライチェーンの種類および年間水素製造量によって決定される
- <例>
- 原料調達に係る電力の使用量
  - 輸送時の軽油の使用量

■ 年間あたりの稼働率

- <例>
- 水素製造プラントの稼働率
  - 輸送用トレーラの稼働率

燃料種	排出原単位（アウトプットのバウンダリ①②③毎に対応する原単位を活用）		
	①利用時	②利用時・輸送時	③LCA
系統電力*	0.47 kgCO <sub>2</sub> /kWh		0.57 kgCO <sub>2</sub> /kWh
都市ガス	2.04 kgCO <sub>2</sub> /Nm <sup>3</sup>		2.33 kgCO <sub>2</sub> /Nm <sup>3</sup>
ガソリン	2.29 kgCO <sub>2</sub> /L		2.67 kgCO <sub>2</sub> /L
軽油	2.62 kgCO <sub>2</sub> /L		3.10 kgCO <sub>2</sub> /L
重油	2.87 kgCO <sub>2</sub> /L		3.20 kgCO <sub>2</sub> /L

総合エネルギー統計・エネルギー源別標準発熱量

IDEA Version 3.1

\*:系統電力について、①利用時②利用時・輸送時の排出原単位は2019年時点、③LCAの排出原単位は2022年の値を参照。将来的な電力構成の変化により変わる可能性有



### 【3簡易版GHG算定ツールにおけるベースラインやサービス需要の想定】

利用段階では、ベースライン機器と水素利用機器のエネルギー効率を目標値やカタログ値から設定し、共通のサービス需要の下で削減効果を算定する

水素システム（評価対象）		ベースラインシステム（比較対象）			共通
利用機器	エネルギー効率	利用機器	燃料種	エネルギー効率等	サービス需要
FCV	13.7 km/Nm <sup>3</sup> -H <sub>2</sub>	ガソリン乗用車	ガソリン	15.4 km/L	9,000 km/年
FCバス	0.82 km/Nm <sup>3</sup> -H <sub>2</sub>	ディーゼルバス	軽油	7.0 km/L	72,182 km/年
FCトラック	2.34 km/Nm <sup>3</sup> -H <sub>2</sub>	ディーゼルトラック	軽油	8.3 km/L	71,347 km/年
FCフォークリフト	0.6 h/Nm <sup>3</sup> -H <sub>2</sub>	ガソリンフォークリフト	ガソリン	2.25 L/h	5,280 h/年
家庭用FC (0.7kW)	発電効率：55% 熱回収効率：40%	潜熱回収型給湯器	変更可 都市ガス	熱効率：80%	9,014.7 GJ/年
		系統電力	電気	排出係数： 0.566kg-CO <sub>2</sub> /kWh	3,443 MWh/年
業務用FC (3.5kW)	発電効率：55% 熱回収効率：40%	潜熱回収型給湯器	変更可 都市ガス	熱効率：80%	8,990.6 GJ/年
		系統電力	電気	排出係数： 0.566kg-CO <sub>2</sub> /kWh	3,443 MWh/年

出所：環境省「水素サプライチェーンにおける温室効果ガス削減効果計算ツール」

### 【3】簡易版GHG算定ツールにおける稼働率の想定

年間稼働率は、水素製造段階では実証フェーズの低位、事業化フェーズの中位、商用フェーズの高位の3種類を想定し、貯蔵～供給段階では1種類を想定

※中位は低位と高位の中央値

SCで選択可能な技術		低位	高位
製造 段階	都市ガス改質 + 精製	10%	80%
	バイオガス改質 + 精製	<ul style="list-style-type: none"> <li>原料が断続的にしか調達できず、低い稼働率となる場合を想定</li> <li>発電コスト検証WGの最低値</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>一般的なプラントメンテナンスを除く稼働率として設定</li> <li>発電コスト検証WGの最高値</li> </ul>
	廃プラスチック改質 + 精製		
	副生水素		
	住宅用太陽光 + 水電解	13.8%	80%
	メガソーラー + 水電解	17.2%	
	陸上風力 + 水電解	25.4%	
	<ul style="list-style-type: none"> <li>METI発電コスト検証WGを参照</li> <li>発電設備のみで水電解装置を賄うと想定</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>一般的なプラントメンテナンスを除く稼働率として設定</li> <li>蓄電池等を用いて対象の再エネ電力を常時利用できる状況を想定</li> </ul>	
貯蔵 （供給 段階	カードル輸送	60.9%	
	水素吸蔵合金	<ul style="list-style-type: none"> <li>国土交通省・令和3年度自動車輸送統計調査より、営業用貨物車の車種別実働率について、LPG及びその他ガスの車種別輸送トンキロで加重平均した値が、ガス輸送に係る平均的な稼働率であるとして、当該値を固定で設定</li> </ul>	
	液化水素ローリー + 水素ST		
	圧縮水素トレーラー + 水素ST		
	パイプライン	100%	
	<ul style="list-style-type: none"> <li>常時稼働すると想定</li> </ul>		